

3 安全対策と危機管理の事例と実際

A 子どもの事故の現状

子どもの事故は実にさまざまなものがあります。交通事故などはマスコミによる報道もありますが、それ以外はどのような事故が起こっているのか具体的に細かくは知られていません。

交通事故以外の事故による死亡事例は、一般の人が思うより多く起こっています。とくに、子どもの死亡原因の上位が「不慮の事故」となっていることは、知っておくべきです。

日本における子どもの死亡に関して、病気などの疾病による死亡は先進国のなかでも最も低いのですが、事故による死亡は非常に多くなっています。事故対策として、感染症サーベイランス同様、組織的な調査・研究が求められているところです。

① 年齢別死亡順位

ここで2016年（平成28）の人口動態調査をみてみましょう。ここから、年齢（群）別に死亡原因の順位をまとめると、病気よりも不慮の事故が目立ちます（表5-4）。不慮の事故による人口10万人当たりの死亡率（カッコ内は人数）は、0歳：7.5（73人）、1歳：4.4（42人）、2歳：1.9（18人）、3歳：1.6（16人）、4歳：0.9（9人）、5～9歳：1.3（68人）となっています。本書の第1章でも指摘していますが、小さい子どもほど不慮の事故での死亡率が高いことがわかります。

② 年齢別死亡原因

「不慮の事故」とは「思いがけず発生した事故」という意味で、「避けられない事故」という印象を与えますが、よく調べてみると実は防ぐことができる事故が多いのです。決して「不慮＝思いがけず」起きたのではないことは押さえておきたいところです。事故発生は、想定外（思いがけず）ではなく、予測可能であるからこそ、同じ事故を繰り返さない再発防止が可能となるのです。

事故を振り返り、その事例を徹底的に調べることで、原因がわかります。原因となったものをなくしていく予防対策をとれば、その後の事故を防いだり、少なくしたりできるのです。

表5-4 年齢（群）別死亡順位

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
0歳	先天奇形、変形および染色体異常（663人）	周産期に特異的な呼吸障害等（282人）	乳幼児突然死症候群（109人）	不慮の事故（73人）	胎児および新生児の出血性障害等（67人）
1歳	先天奇形、変形および染色体異常（79人）	不慮の事故（42人）	心疾患（19人）	悪性新生物（13人）	肺炎（12人）
2歳	先天奇形、変形および染色体異常（40人）	悪性新生物（20人）	不慮の事故（18人）	心疾患（8人）	肺炎（2人）
3歳	不慮の事故（16人）	先天奇形、変形および染色体異常（15人）	悪性新生物（12人）	肺炎（9人）	心疾患（8人）
4歳	先天奇形、変形および染色体異常（16人）	悪性新生物（14人）	不慮の事故（9人）	肺炎（6人）	心疾患（4人）
5～9歳	悪性新生物（84人）	不慮の事故（68人）	先天奇形、変形および染色体異常（32人）	肺炎（19人）	心疾患（15人）

（厚生労働省：平成28年人口動態統計より年齢別に作成）

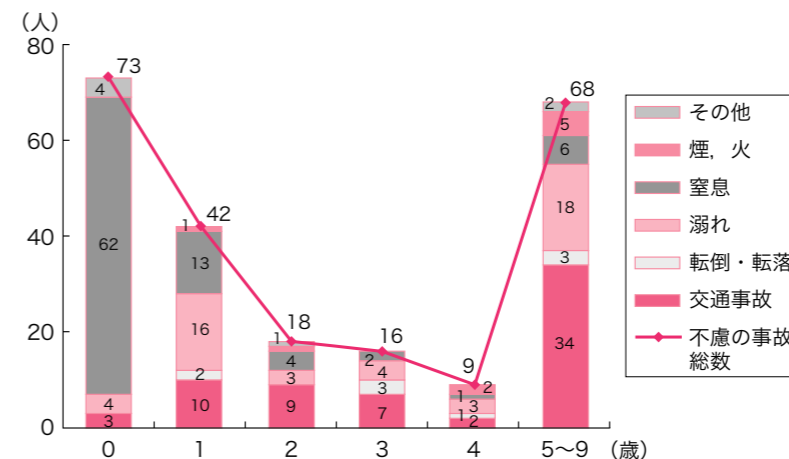


図5-3 年齢別死亡原因と人数（不慮の事故）

（厚生労働省：平成28年人口動態統計）

第1章では『健やか親子21』の取り組みを紹介していますが、子どもの不慮の事故についてはその死亡率の半減目標が掲げられ、目標を達成しました。多くの事故が予防できるのですから、さらにゼロに近づける努力が必要です。

それでは、ここで年齢（群）別にどのような事故で亡くなっているのか2016年（平成28）のデータで詳しくみてみましょう（図5-3）。

2011年（平成23）の死亡原因について

東日本大震災による死亡が多いため、特異的な年となっています。

不慮の事故による死亡数の比較

(年)	2010	2011	2012
0	113	199	93
1～4	151	380	123
5～9	125	353	103